



# 双塔

カトリック新潟教会

2017年7月  
No. 350

## イエスのたとえ話

協力司祭 鎌田耕一郎

(たとえ話) 「たとえ」はギリシャ語でパラボレーといい、「相並ぶ、比較する」ことを意味している。自然や人間の日常生活の具体的な事実と、ある宗教的な教えが相並んでおかれ、しかも「たとえ」の中で、宗教的な教えは、具体的な話の中に、隠されているのが普通である。そのため、そこから真理を汲みとることは聞く人に委ねられ、イエスがいわれたように「聞く耳を持つ」ことが前提になる。

イエスは、動物や植物が人間のように話したりする、おもしろいが現実味に欠ける寓話——イソップやラ・フォンテーヌのような寓話を語らなかった。その「たとえ話」は生き生きとした日常生活の息吹を感じさせる。野のゆり・空の鳥など自然に向けられた目、種まき・ぶどうの木・毒麦のことなど、ガリラヤの農夫や、ゲネサレ湖に網を下ろす漁師の描写、梁（はり）や鋤（すき）について語る時、イエスの仕事であった大工の目がうかがわれる。パン種のたとえには、おそらくマリアさまのこねた粉が一夜でふくらんだ、子どものときの新鮮な驚きが含まれているかもしれない。

その内容は単純明快で、無駄な修飾やひねくりまわした論理は見られない。「あまりにも単純で、学者たちにはかえってわからない話の中に、その教えを含む」とモーリアックは感嘆する。それは単に教訓的であるよりも美しい詩に似ていると思う。解釈するだけではなく、その響きに耳をすませ、魂を共鳴させるべきものではないかと思う。

そして、何よりも驚くべきことは、あらゆる文学的技巧を超えて心に訴える強い力である。その秘密はイエスのみ心に燃える神聖な情熱と、すべてを見通す永遠の叡智にあるのだろう。二千年前に語られた数かずのたとえ話は、今も読む者の心を揺り動かし、自由な決断を求めるのである。

(迷える羊 マタイ18章・ルカ15章) 私たちは迷える一匹の羊がかけがえのないものとされる世界の中に、生きていないように思われる。経済的には、一匹より九十九匹のほうが大切で、おそらく一匹ぐらいの損失は計算済みと冷然としているかもしれない。或いは政治的には、民主主義と呼ばれる多数決原理の中で、一匹の小さな声は、結局多数の声にかき消されることになる。羊飼いのたとえは、力強い単純さで、神はよき羊飼いのような方であり、すべてのいのちには神の深い思いがこめられていること——イエスがいちばん伝えたかったことがのべられている。

## そよかせ便り

### ■ 新潟清心女子中学・高等学校ハンドベル部 25周年記念コンサート ---- 5月27日(土) 15:00 ----

開演前、内陣の前にしつらえられた演奏台には大小さまざまなベルが並べられていた。大きなものは4kgにもなるという。

今年で25周年になる新潟清心女子中学・高校ハンドベル部(指導:藤崎和子教諭=寺尾教会=)。この日は100名を超す来場者があり、幅広いレパートリーが披露された。

この演奏会はチャリティーコンサートとして行われ、集まった募金はカリタスジャパンへ寄付されるという。

### ■ 聖霊降臨の主日・司教様を囲んでミサと茶話会 ---- 6月4日(日) 9:30 ----

「聖霊降臨は〔使徒の後継者としての〕司教様の祝日」(ラウル神父様)。好天に恵まれたこの日、聖堂にはいつもよりも多くの人が集まり、菊地司教様の司式によるミサがささげられた。

ミサ後はセンター1階で司教様を囲んでの茶話会。「司教様への質問コーナー」では「年齢は?」「新潟市内お気に入りの散歩コースは?」「海外出張の時差対策は?」などの質問が飛び出した。ちなみに海外出張の時は飛行機に乗るとすぐ、時計を到着地の標準時に合わせてしまうのだとか。

この茶話会では「語らいのコーヒーコーナー」のマスターがコーヒーを提供、和やかなひと時が流れていた。

#### 菊地司教様の説教から

- \* ハンドベルは、ひとつのベルでひとつの音程しか奏でることができない。
- \* 他の楽器はソロでも演奏が可能であるが、ハンドベルはそうはいかない。演奏者一人一人が脚光を浴びることはないが、一人たりともなくてはならない存在である。これは、教会共同体と似ているところがあるのではないか。
- \* 信仰は一人で生きることができず、共同体とともに生きるもの、しかし、一人ひとはどんな小さな働きであっても共同体にとって不可欠の存在である。

### ■ 教会敷地内除草奉仕 ---- 6月11日(日) 9:30ミサ後 ----

前日の強風と打って変わって晴天に恵まれ、暑くもなく寒くもなく絶好の除草日和となった。慣れない手つきで鎌を使う子供たち、黙々と鎌を動かす大人たち、各々夢中になるあまり、委員長の終了の号令後もひたすら鎌を動かす姿がみられた。終了後はパンとお茶が振舞われ、互いの労をねぎらった。綺麗に刈り取られた芝生ではツツジの鮮やかなピンク色や、バラの赤色が際立っていた。

### ■ 聖体賛美式 ---- 6月18日(日) 9:30ミサ後 ----



キリストの聖体の祝日にあたり、9時半ミサの結びに聖体賛美式が行われた。ラウル神父様は聖体賛美式について「最高の形はミサの中で聖体を拝領することだけでも、ともにいると約束してパンのうちに与えられるイエス様の前で沈黙のうちに祈る聖体賛美式という形の祈り方もあります」と会衆を招き、聖歌が歌われる中、聖体を顕示。しばしの礼拝の後、聖体による祝福(左の写真)、賛美の祈り、結びの聖歌で締めくくった。

## あゆみ

No.85 教会運営委員会

講座「知ってるつもり?! 典礼のしるし、ことば、動作」

指 導 主任司祭 ラウル神父

日時会場 7月8日(土) 午前10時~11時 カトリックセンター研究室

講座内容 ミサの式次第にそって、「感謝の祈り」(奉献文)、「交わりの儀」を中心に取り上げます。

事前に準備するものではありません。どなたでもお気軽にご参加ください。

カトリック新潟教会 月刊「双塔」 毎月1回 最終日曜日発行 編集・発行/カトリック新潟教会 教会運営委員会 広報部  
〒951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町 656 TEL: 025-222-5024 FAX: 025-222-5054